

□連載小説 19

キリシタンの墓

小山 牧子

え・石阪 春生

修羅 2

あらすじ 二年前短期大学を卒業した佳は、母蘭子との生活に息づまりを感じ、米国系海運会社のエージェントに勤めに出ることにした。ある日、佳は福成寺の墓地の暗がりで見えた村重船長と名乗る老人から、偶然自分の父村林裕作の過去を知る。その父が久しぶりに航海を終えて神戸に帰ってきた。が、母蘭子の冷たい態度に佳の心は複雑だった。そんなある日、佳は新聞に蘭子の短歌が載っているのを見つけるが、まさしくそれは裕作の初恋の女性、故由佳子の短歌の盗作であつた。酒に酔った裕作は蘭子の名をよぶ九官鳥を床にたたきつけてしまう。

酔いに乱れた父裕作が、蘭子のものである九官鳥の首をへし折ったあの雨の夜以後、見せかけだけにせよ存在した館の平穏な日常の時は失われた。

翌朝、濡れた叢の上にひっかかっている鳥の骸を見つけた蘭子の表情には、殺戮者への怒りの色はなく、夫の所業であると知っているのかどうか、そこには安堵の色と、そしてあるかなしか勝ちほこったときの表情があるように佳には感じとられた。もし夫の所業であると蘭子が察知してのことならば、裕作の激しい行為も、妻を愛しているゆえの嫉妬からでたこととおもえばかつて寛容になれるのだろうか。

紫峰の愛に殉じる情など毛頭ない蘭子にとっては、その忘れ形見である不吉な黒い鳥を夫が始末してくれたことは、むしろ感謝してもいいたぐいのことであつたらしいが、裕作にとっては鳥の無惨な死にも平然としている

蘭子は、不可解というよりも無気味な存在であるに違いない。

虚名を得るといふむなしい情熱につかれ、それ以外のより大切なもの、骨肉や恩師への愛をためらいなく切り捨ててかえりみぬ強い女。

脇坂紫峰が失踪した翌朝、佳が、愛人と噂された仲の老歌人の枯渇したうたごころを手厳しく批判し、その失踪に悲しみや動揺の色を見せぬ蘭子をなじっていった同じ「冷たい女」の言葉が、裕作の脳裏をもよぎったであろう。

せめて夫のためでなくてもよい。長年の師であり、恋人同志と噂されあつた男の不幸に慟哭の声をあげる女らしい情を蘭子が持っていたら、夫である裕作は、傷つきながら、堪えられぬほどの苦痛を堪えしのびながら、一つづつ妻をゆるし、その女の情の糸の端をさぐりあてたぐり寄せ、再び夫と妻の絆につながれることもできるのではなからうか。

が、紫峰失踪のときと、鳥の骸をひろいあげてビニールの袋に入れ、台所の汚物と一緒に無造作に清掃車の荷台に放りこんだときの蘭子の表情は、まるで、石、石の壁だったといってもいい過ぎではない。

この女を人間同志の愛や情緒の世界に引き戻すことは並の血の通った男にできるものではない。

裕作の蘭子を見る目には、深い絶望の色があった。絶望しながら裕作は、かつて佳がことごとく蘭子に反抗したと同じ方法で、しかし、いたって弱々しくその石の壁を砕こうとする。

「私のことは、もうよろしいのです……」

ある夜、階下の居間から裕作のいつにない高声が響いてきた。

「しかし、佳のことだけは……」

「なんですって！ 佳を悪くしたのは、あなたでしよう」死をよそおって静まっていた火山が、とき満ちて噴火するように、蘭子の声が古い館の中で炸裂した。無言のままで見えない刃を振りかざしていた父と母の間に言葉の切りあいがはじまったのだ。佳は、足音をしのばせて階段の途中まで降り、そこにうずくまって耳をすませた

「佳は、愛情に飢えているのです」

「違います。二十三歳にもなつてまだ自立できない娘なんて、絶望的じゃありませんか。あの娘は、いま流行の言葉でいうならば、脱子供ができていないのです」

「その責任がこの私にあるのですか？」

「そう、当然でしょう」

蘭子の言葉を聞いて、怒りで身体を小さく震わせる佳には、その馬鹿丁寧なほどの切口上で応酬しあう二人の様子から、裕作もまたかなり激昂しているであろうことが想像できた。

「どうして？ どうして私が悪いのだ？ 私は年がら年中船に乗っているのですぞ。家にはないのですぞオノ」
「そうでしょう。佳と接触する時間は短いでしょう。だけれど、その短い期間の佳への影響力があまりにも強すぎるのです」

「なんだって？ そんな言い方はよくわからん。それに、接触とはなんだ。そういう動物的な言葉を、私と佳の間で使うな！」

裕作の仕業だろうか、なにか重い物をテーブルに打ちつける音が響き、そのあと奇妙に冷静な蘭子の声で、「話をそらさないで下さいまし。わたくし達はいま、佳のことを話しあっていたのでしよう。はっきり申しあげられることは、あなたが佳になにか不自然な夢をかけていらつしやるのがいけないのです。そして、佳に接……あら接触という言葉お気に召さないようでしたわね。佳にむきあうとき、あなたは必要以上に自分を優しく見せようとなさる。父親などというものは、もつと自分の子供たちに、父親への失望感を持たせるように仕むけるのです。子供たちは、その情けない親たちを踏みこえ乗り越え、現たちよりも立派な大人に成長してゆくのです。それが、あなたはどうでしょう。御親切にも、この現実の世界では決して存在しないような完璧な恋人の役目さえも佳のために演じてみせる。これでは手も足も出ないではありませんか。親はいつまでたつても一人立ちできない子供のままです」

「なに！ また屁理窟か！ そうだろうな、あんたは偉い人なんだから、女流歌人、村林蘭子、蘭子女史か！ 先生、大先生の口達者にはかなわんよ」

自嘲的とも聞こえる裕作の語調に聞き耳をたてる佳は、一瞬、強い不安を感じた。――また酔っている――。裕作は、したたかに酔っているらしいのだ。佳は、そんな父を真実可哀そうにおもふ。一年の大半を航海で過ごし、家庭管理の責任をすべて蘭子にまかせているためか、裕作はいつも蘭子に対しては弱腰になる。佳は、そんな父のやり切れないであろう胸の内をおもいやっていたが、今度、休暇で帰った父は、ずいぶん勝手が違う。感情の抑制がきかず酒に乱れがちなのは、急に老い込んだせいであるのか。

「もうお飲みにならないければよい」

やがて、蘭子の痼性な声が響いた。

「放っておいて下さい」

父は、まだグラスを手にはしているらしい。裕作の声は

「嫌いですか？ 飲んだくれの亭主は……」

言葉をとぎらせたあと、裕作は唐突に、狂暴なほどの語調で、それまでじつと堪え続けていたらしい言葉を蘭子にたたきつけたのである。

「盗人の亭主は、飲んだくれでなくさんだ！」

「なんですって、あなた!? いつわたくしが……」

「歌だ。あんたは由佳子の歌をぬすんだ」

裕作の声は、うめくように悲痛な響きを帯びていた。

一瞬、言葉を失ったらしい蘭子であったが、やがて沈黙した空間を切り裂くかに似た奇妙に冷静な高い笑声をあげながら、

「まあ、相変らずロマンチストなのね、あなたは……」

「ロマンチストだとオ。そんな次元の問題ではない。あんたが恥を知るか知らんかが問題なんだ」

「恥ですって？ どうして恥なのですか？ わたくしは、一

つの築かれた伝統の上に新しい花を咲かせたのです」

「馬鹿な！」

「ま、聞いて下さい。歌の生命は、それを創造した歌人の命が絶えるのと同時に失われるのでしょうか。わたくし、そうはおもいません。由佳子さんの歌は、彼女の死と同時に埋れてしまっていたのです。わたくしは、生きているものの義務として、その歌に再び生命を与え、更に至高のものへとその歌を浄化させてやらなければならぬのですわ。それでなければ、本当にごく一部の人のちの努力によって守られてきた短歌という伝統的な芸術の灯は消えてしまうのですわ。わたくし、いまほど生きていることがすばらしいとおもったことはありませんの由佳子さんに生ききれなかった生命に、わたくしのこの熱く燃えさかる生命を継ぎますのですもの」

厚顔にも、蘭子は盗作という芸術家として最も卑劣な自分の行為にさえも、例のこじつけ理論の裏打ちをしようにとしているのだ。

「で、では……死んだ由佳子が死に損だというのか！」
ついに裕作は逆上したらしい憤怒の声をあげ、同時に

立ちあがったのであろう。が、すぐによろけたらしく、身体を床にたたきつける鈍い響きが佳の耳に伝わってきた。そして、内臓全部をしばらくあげるに似た苦しげな嘔吐とうめき声――。

たまりかね、佳は立上った。

「パパノ大丈夫？」

大声で呼びかけながら階段を駆け降り、居間に飛び込んでゆく。

裕作は、両手の指で胭脂色の絨毯の毛をかきむしる仕種で、必死に嘔吐をこらえているらしく、背中が大きく波立っている。その横に突っ立ったまま、苦しんでいる夫を見下ろす蘭子の表情は、見るものを慄然とさせるほど平静で、血の通わぬ彫像に似たある種の美を宿していた。

「ママ、早く洗面器を！」

しかし、せきたてる佳の声に、蘭子は動こうとしな

い。
裕作は吐いた。吐きながら、身体を縄のようによじり身も世もなく悲しげに、裕作はうめいた。

「いいの。いいのよ、パパ。心配することなんかないのよ」
佳は、心をこめて裕作の広い背中をさすりあげる。まめまめしく父を看取る佳と、顔を汚物にまみれさせ、したたかにくじけている裕作の醜さ――。蘭子は、そんな父と娘のありようを、顔に嘲笑の影さえ宿して見ていたが、

「いやだわ、わたくし、こんな形而下なことには堪えられない。ケイ、絨毯のお掃除もお願いね」

言い残すなり、顔の前によどむ酒と汚物の残臭を払うためとでもいうように、袂の端を扇がわりにばたつかせながら、自室に引きあげてゆこうとする。

「ママノ」

ふりあおいで咎める佳の目に涙がふくれあがった。が次の一瞬、蘭子の後姿は、居間の重厚な彫り込みのあるドアのむこうに消えていた。

(つづく)

—オリジナル L サイズ—

—草履新発売—

創業明治二十八年

履物の山下

古い老舗に新しいセンス

確実正札 完全冷暖房

静かに品選びの出来る店

神戸三宮センター街 TEL(391)0256

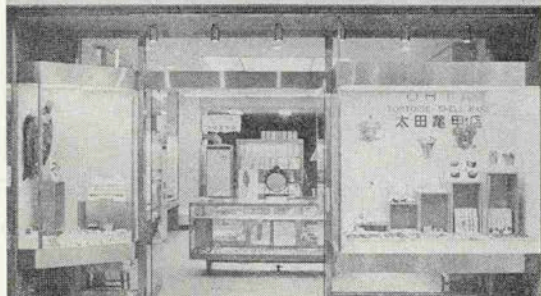


ハイセンスの紳士服で最高のおしゃれを!

三恵洋服店

元町4丁目 TEL(341)7290

太田鼈甲店



べっ甲美術品とアクセサリーの専門店

太田鼈甲店

元町1丁目 TEL(331)6195



Mr. Kent

came to Kobe

流行に左右されない

本来のオシャレ

それがKentです

シックな

スコッチ風の店舗

それがFunakiyaです

Kent shop

フナキヤ

元町3 TEL(321)0356

でんわ・
321 321 331—三七七
—〇六三四
—〇六三五

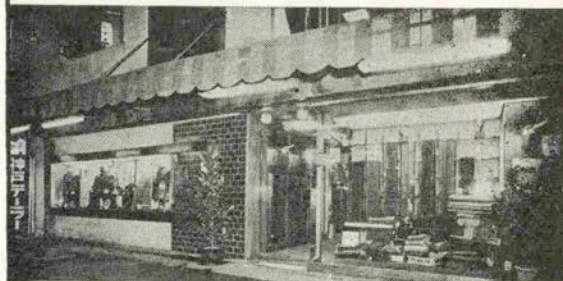
三宮
ムサシ

やっぱりうまい
むさしのとんかつ

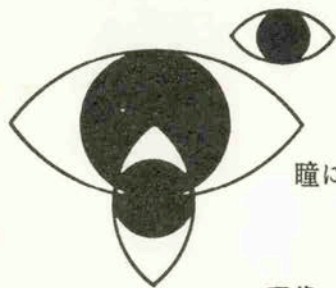
ムサシ

高級紳士服専門店

神戸テーラー



さんちかメンズタウン TEL (391) 0388
生田区北長狭通2(阪急西口) TEL (331) 2817・3173



瞳に美しさを保つ
スポーツに
美容に
現代の科学が生んだ
コンタクトレンズ

日本コンタクトレンズ協会会員

国際コンタクトレンズ研究所

神戸市鈴合区御幸通八丁目九ノ一 (三宮駅前)
神戸国際会館内 TEL (251) 8161・(231) 2570

おすし
てんぷら



栄 彌

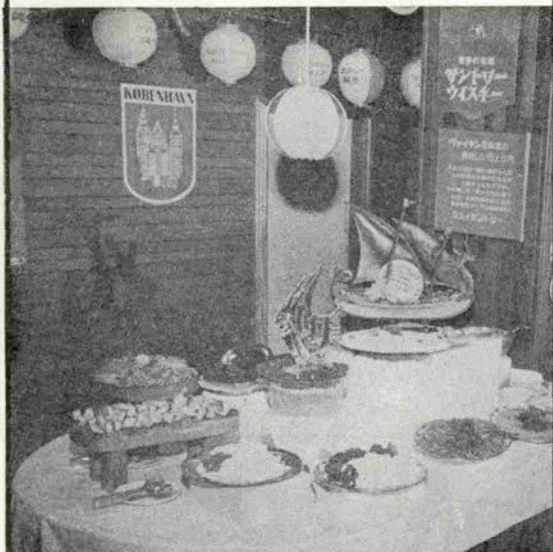


支店
さんちか味ののれん街
TEL (391) 5233
(第3水曜日休み)

本店
大丸前・三宮神社東
TEL (331) 5673
(毎週水曜日休み)

営業時間
A.M. 11.30 ~ P.M. 9.00

パーティ、忘年会に！



〈北欧ヴァイキング料理〉

2000円〈税込み〉

飲みほうだい（サントリー純生ビール）＋食べほうだい
クラウン・コーラ

一品料理、日本酒も準備いたしております
同窓会など各種パーティにご利用ください



なごやかなムード

すばらしい眺望！

スカイサントリー

三宮交通センタービル 9F TEL (391) 3705～6



アサヒビール特約代理店

● お酒の殿堂

酒類調味食品問屋

☎ 神戸酒類販売株式会社

本店・生田区中山手通 1 丁目 76










TEL (078) 321-0201 (代表)

支店・西宮・垂水・兵庫

うらない師 向井修二 生月による 11月の運勢

〈11月1日～11月30日〉

★一〇〇%確実当る ★リズムをつけて読むこと★★

12月生	11月生	10月生	9月生	8月生	7月生	6月生	5月生	4月生	3月生	2月生	1月生
思考力を強く	性に注意	苦労がある	異性とうまくいく	欠陥車に用心	人との対話をよくする事	反省のチャンス	コミュニケーショントラブル	なまけぐせ注意	独立独歩精神	自分の気持を大切に	はやとちり注意
											
♀ ♂	♀ ♂	♀ ♂	♀ ♂	♀ ♂	♀ ♂	♀ ♂	♀ ♂	♀ ♂	♀ ♂	♀ ♂	♀ ♂
精神病院入院しても、まわりの先生精神異状どちらが精神なおします？ 舌が肥え、耳まで肥えてなれのはて、ブルジョア文化人になりたいわ。	セックス談義をいろいろしても、あなたの知識は変らない。 どうしてこんなに吸血鬼にねらわれるのかと思えば私は生理中	苦労話しをあれこれしても、わかってもらえないはずはなし、そんなに甘えちゃいけません。ゲップで車もお家も買った、又又ゲップで世界も廻り、あとのゲップでアップアップ	苦労話しをあれこれしても、わかってもらえないはずはなし、そんなに甘えちゃいけません。ゲップで車もお家も買った、又又ゲップで世界も廻り、あとのゲップでアップアップ	欠陥・欠陥とさわいでいるが、それなら完全あるのかなあ？ 欠陥息子と欠陥娘、二人そろって結婚すればこれが本当のケツカン式	先生、先生といばるな先生、先生いなくても子は育つ。 虫が好かぬとお人は言うが、なんでもてます若いから？	先生、先生といばるな先生、先生いなくても子は育つ。 虫が好かぬとお人は言うが、なんでもてます若いから？	先生、先生といばるな先生、先生いなくても子は育つ。 虫が好かぬとお人は言うが、なんでもてます若いから？	先生、先生といばるな先生、先生いなくても子は育つ。 虫が好かぬとお人は言うが、なんでもてます若いから？	先生、先生といばるな先生、先生いなくても子は育つ。 虫が好かぬとお人は言うが、なんでもてます若いから？	先生、先生といばるな先生、先生いなくても子は育つ。 虫が好かぬとお人は言うが、なんでもてます若いから？	先生、先生といばるな先生、先生いなくても子は育つ。 虫が好かぬとお人は言うが、なんでもてます若いから？

曲線ハイウェイ

武田 繁 太郎
え・横 塚 繁

長い栗色の髪を垂らした女の後ろ姿を垣間みたのは、幻影だったかと、多木はわが目を疑った。

逢いたいと焦れていた願望が、多木に幻影を抱かせたのかも知れない。

他人の空似とは、よくあることだった。欲目でみれば、長い髪を垂らした後ろ姿が、宇津康子に似た女は、いくらでもいただろう。

しかし、多木は自分の目の錯覚だったとは思いたくなかった。

偶然ということだってありうる。ここは、宇津康子の住んでいる神戸のクラブだった。この店に彼女があらわれても、べつだん不思議でもなかった。

だが、ここは、女ひとりだけでくる場所ではなかった。連れがいなければならぬ。

多木は、思わずまた、瞳をこらして、ほの暗い店の隅をながめやった。

だが、女の後ろ姿は、すでになかった。女はちょうどふとい円柱のすぐそばで後ろ姿をみせていたのだが、その円柱のかげに吸いこまれるように、女の姿はかき消えていた。多木は、円柱の向う側の客席をみまわした。客席のひとつひとつに、素早い視線を走らせていった。

だが、それらしい姿は、どの客席にもみあたらなかった。どこへ消えてしまったのか。やはり、多木がみたの

★あらずじ 浜名湖サービスエリアで、多木洋介は若い神戸の女性、宇津康子と知り合い、一夜を過ごした。その夜も、十日か半月おきにデイトの電話をかけてくる康子と多木はMVハードトップを駆って逢瀬を重ねた。康子の魅力につかれた多木は正体を知るため、神戸出身の友達岡本和彦とその女友達ルミと共に名神を走り、神戸へやって来た。康子の居所を見出せぬ多木は、彼女に面影に似た辰馬英子を紹介された。典型的な神戸っ子である英子に案内され、神戸の街を歩いた後、六甲山をドライブに出かけた。ロマンティックな情景に誘われて、英子を抱きしめた多木の胸に始めて感じるいとおさがつづいた。その夜、岡本たちとクラブMへ行った多木はほの暗い店の隅に、長い栗色の髪をたらしした女の姿を認めてハッとした。

は、幻影だったのか。多木は、自分がまだ立ちばだかっただまでいることにも、自分で気づかずにはいた。

「どうなさったの？」
英子が声をかけた。

「ああ」

多木は、夢からさめたようにうなずきながら、ようやく席に腰をおろしていた。

だが、夢はまだ完全にさめてはいなかった。あの女の後ろ姿が、多木のみた幻影だったとすれば、彼はあのとさから夢をみていたことになる。

いや、幻覚ではない。たしかにみたのだ。あの後ろ姿は、まぎれもなく宇津康子にちがいがなかった。とすれば、いったい彼女はだれとときていたのか。連れはどんな



男なのか。

詮策してみても、どうしようもなかった。苛立たしさが募るだけであった。追いつがるように、円柱の向う側の客席をたしかめてみても、女のいる気配さえも感じられなかった。岡本がにやにや笑いながらいった。

「どうした？ いやに浮かん顔をしてるじゃないか」

「いや。べつに」

多木は平静さをよそおって首をふったが、すっきりしない口調になっていた。

「まあ、いいや。大いに吞もうじゃないか。今夜は、多

木の米神を歓迎して、おやじの奢りといこう」

そういつて、岡本は、ボーイにスコッチを瓶ごと持ってこさせた。多木たちは水割りにしたが、岡本は、ストレートでありながら、横井にいった。

「おやじ、今夜は例のほうだな？」

横井は笑って答えなかったが、それが返答になっていた。

「ふん。馬鹿おやじめが！」

岡本は吐き捨てるようにいつて、またグラスをひと呑みにあおった。

「多木。最低に愚劣な話をきかそうか。おやじのやつ、また新しい女を開いやがった。須磨のほうにな。かわいそうに。横井がそのお守り役を仰せつかっている。月末になると、うやうやしくお手当てをご持参だ」

横井は表情を殺した笑顔できいていた。

「このちかくに、おやじが最真にしているBというクラブがある。ちよつとかわいいコがいて、おれ、頂いちゃったんだ。おれの妹とおない年だ。ということ、おやじにとっては、自分の娘とおない年という勘定になる」

「じゃ、つまり、そのコが——」

多木は呆れ顔でいった。だが、ルミは、岡本に寄りそったまま、けろりとした顔できいていた。その肩に腕をまわしたまま。岡本はいった。

「もちろん、おやじは、おれとそのコのことには知らん。知らぬが仏つてやつさ。だけど、間抜けなのは、どっちか。おれが女を盗られたのか、おやじがお古を頂だいしたのか。どっちにせよ。おれとおやじは、父子で、そのうえ兄弟になつちまつたつてわけさ。しかも、おれのほうが兄貴だ。どうだ。最低に愚劣な話だろう」

「うむ——」

多木は合槌のうしろもない思いだった。だが、そのときふと、多木の脳裏をかすめるものがあった。もしか

したら、宇津康子も、そのコとおなじような種類の女ではなかったのか——。多木の目も無意識にすわってきいた。

だが、岡本は、あいかわらず他人の話でもきかせるように、投げやりな口調でいった。「おやじもおやじだが、おふくろもおふくろなんだ。おやじの女癖のわるいは、むかしから持病みたいなもので、おふくろも我慢してたんだが、ちかごろ流行のウーマン・リブってやつかね。おふくろも女の意識にめざめたらしく、いい年をして荒れてきやがった。うちののっぺりしたいやらしい二枚目社員をベットにしてやがる。横井。君にもいちどは白羽の矢がたったんだらう？」



「まさか」

横井はあわてて首をふった。岡本は、にやりと笑っていった。

「両親がそういう調子だから、子弟にはいい教育になるさ。妹は碧い目のフーテンやろうにのほせやがってるし、おれはごらんのとおり。わが家はもうメロメロだ」上流の階級と下層の階級になるほど、性は乱れていると、多木はきいていたが、岡本家はその典型なのかも知れなかった。豪壮な邸宅をかまえていても、この家庭からは、腐ったリンゴのような匂いがたちのぼっているにちがいない。

岡本が、始終神戸に帰ってきてても、わが家に寄りつかない理由のひとつが、多木には納得できた。

「英子さん、踊らう」

最低に愚劣な話にむかついたように、多木は、何杯目かの水割りをぐっと干すと、英子の手をとって、フロアにでた。

「さっきは、どうして妙な顔をなさっていたの？」

踊りながら、英子が、ずっと気にしていたようにたずねた。

「ああ。君にそんなふうに見えたとしたら、そりゃ、あんなハレンチな話をきかされるだろうと、いやな予感があったからだろう」

多木は、かるくいなすようにいった。

だが、あのときおぼえた苛立ちは、まだ胸中に尾をひいていた。ぶすぶすときすぶりつづけていた。

バンドがテンポの早い曲を流しだした。

「ちょうどいい。君、ゴーゴーやれるね？」

「ええ」

「じゃ、ゴーゴーといこう」

「駄目よ、ここじゃ」

「なに、かまうもんか」

「駄目駄目、このまま、おとなしく踊りましよう」

「いや、岡本のやつ、あの調子じゃ、今夜はひと荒れし

＜神戸の催物ご案内＞

＜音楽＞

★71神戸市民劇場

バリ「木の十字架合唱団」

12月5日(日) PM6:30 神戸国際会館

入場料 A¥1500 B¥1200 C¥900 D¥600

★「第九交響曲の夕」 大阪フィルハーモニー交響楽団

12月14日(火) PM7:30 神戸国際会館

労音 会費 1,100円

指揮 外山雄三 独唱 S中沢桂 A成田絵智子 T丹羽勝海 B栗林義信

★「第九の夕」 京都市交響楽団 神戸国際会館

12月18日(土) PM6:30 19日(日) PM2:00

入場料 A¥1300 B¥1000 C¥700

指揮 渡辺曉雄 独唱 平田恭子 田原祥一郎 石光佐

千子 木村俊光

★クールファイブ

12月20日(月) PM2:00 PM7:00 神戸国際会館

民音 会費 ¥950

★トア・エ・モア「クリスマスを歌う」

12月22日(木) PM6:30 神戸国際会館

労音 会費 ¥1000

協演 シローとブレッド&バター トア・エ・モアファミリー



★「第九の夕」 大阪フィルハーモニー交響楽団

12月24日(金) PM7:00 神戸国際会館

民音 会費 ¥950

★第26回ボードジュビリー

12月25日(土) PM6:00 神戸国際会館

入場料 ¥350

★ダークダックス「71さよならコンサート」

12月27日(月) PM7:30 神戸国際会館

入場料 S¥1800 A¥1500 B1000 全席指定席

演奏 白井克治とニューソニックジャズオーケストラ

＜演劇＞

★俳優座公演「ブンティラの旦那と下僕マッティ」

12月1日～3日 PM6:15 神戸国際会館

労演 会費 ¥600

ブレイト作・千田是也演出

出演／三島雅夫、中谷一郎、袋正、中村たつ、石橋智子他

＜映画・浪曲＞

★「おお活動大写真」懐かしの無声映画大会

12月7日(火) PM2:00 神戸国際会館

入場料 指定席¥1000 自由席¥700 前売¥800、¥500

尾上松之助「忠臣蔵」 井上正夫「己ヶ罪作兵衛」

片岡千恵蔵「ごころ様時代」

★浪曲大会と浪曲忠臣蔵お芝居

12月9日(木) AM12:00 PM5:00 神戸国際会館

入場料 特別席¥2000 1等席¥1500 2等席¥1000

そうだ。そうなら、こっちで先手をうつにかぎる。さあ踊ろう」

多木は、英子の腕をほどくと、勝手にゴーゴのテンポで身をくねらせはじめた。

「こっちは、ご常連の岡本貿易の御曹子のお連れさまだ。文句をゆうやつもいまい」

「しょうのないひとね」

英子、駄々っ子の相手をさせられるように、ひかえめにゴーゴを踊りだした。

「よお、やつてるな。いいぞ。おれたちも負けずにやろう」

いつのまにか、岡本もルミを連れて、多木たちのまえにあらわれ、ならんでゴーゴを踊りだした。

岡本は生のスコッチをがぶ呑みして、もうかなり酔っていた。多木にも水割りが十分にまわっていた。二人の酔眼には、もう店内の客など写ってはいなかった。

「はい！」 「はい！」

二人は、それぞれのパートナーを相手に、全身を烈しくくねらせていった。

だが多木の胸中にくすぶっている苛立ちは、いつまでもおさまらなかった。彼は無性に腹だたしくなってきた。

た。うつ積しているものを、なにかに思いざま投げつけてやりたくなった。多木は、ゴーゴのステップのまま、英子をリードして、岡本たちのそばからはなれていった。二人は、ふとい円柱のそばまできていた。踊りながら、多木は、あたりをうかがった。だが、やはり女の後ろ姿は幻であった。ふいに、まだみない岡本の父親の女の顔と、宇津康子の顔とが重なった。狂暴な感情が喉もとをこみあげてきた。

「英子さん。これから、みんなをまいてやろうじゃないか」

「みんなをまく？」

「うむ。まくんだ」

多木は強引に英子の腕をとると、うす暗い店の隅をつたって、入口のほうへ歩んでいった。

「もう引揚げるの？」

「いや、どこかヘドライブしよう。どこでもいい。そうだ。こんどは海のほうへいこう」

多木は英子の肩を抱くようにして、Mをでると、ちようちよちよちやってきたタクシに、さっと手をあげた。

(つづく)

又、グラビアの船上での写真乗しく拝見いたしました。神戸モードがいかに多くの神戸のメーカーから誕生しているかを知り、あらためて神戸のファッション感覚のスパラシサに感嘆した次第です。プレゼントコーナーもたのしみです。

発行にいろいろお世話いただいた方がた

神吉行山若百村宮宮松福深原畑原野南中中西直外竹
戸原吉口杉崎上地崎井富水 口沢部西卷脇木島馬
年治哉泰 辰正 辰辰高芳恵泰専忠幸圭 太健準之
会議所良女弘慧雄郎二雄男美吉良郎郎三勝弘親郎吉助

★「神戸っ子」の皆さん。お元気で

(東灘区・安田涼子)

A simple line drawing of a cartoon character with a large, rounded head and a small body. The character is holding a single sock in its right hand. The character has a small, curved line for a mouth and a single dot for an eye. It is wearing a long-sleeved shirt and pants. The drawing is minimalist and appears to be a sketch or a simple illustration.

月に激動した。一九七一年も最後の月を迎えました。うっかからすると世界の孤児になるんじゃないかと日本の行末が案じられています。これから十年が試験の時のよう。神戸の街もパンチにたえて飛躍できる街でありますように。(小泉康夫)

★神戸っ子は二一八号を重ねて、いよいよ来年は十一年度。新年号からは、神戸のうらおもてをクマなく探して行きたいと思っています。乞ひ期待★た今五キロ減量!ワタタシが「恋やつれやネン」と申しますと皆の衆はゲラゲラゲラ。ほんまにケツタクソ悪い師走であります。コレカラワッ。(小泉美喜子)

★一九七一年もあとわずか。今年も国内、国際的な問題があれこれ出てきた。今月は今年の締めくくりとして

▽横並社長と南部社長にこの一年を

神戸っ子ごあんない



6 力月分	750 円
1 年分	1500 円 (送料共)

★月刊の神戸っ子をお買求めの時には左の本屋さんへどうぞ。

文流漢ニコ
洋泉口ユウ
堂書房堂口ベ
新新聞セン京さん
聞会館スタ川ち
館1階街筋タウ

(橋本明)

と思つてはみたものの、朝に弱い小

(1) 57.46 (1.1)

坤
子
NO.
28

★発行／昭和46年12月1日
★編集・発行／小泉康夫
★発行所・神戸っ子編集室
神戸市葺合区八幡通5ノ96
K・Eビル4階
電話2217037・8072
2213046
頒価・100円